

編集：山田浩司&美澄

Address: 2208 North Quantico Street, Arlington, VA, 22205, USA

Phone: 1-703-241-0621 E-Mail: mickeyy@pc4.so-net.ne.jp URL: <http://www.sanchai.net>

ここはDC?それともアイオワ?

東海岸大寒波襲来!

今年の冬は寒くなりそうだ。祖母の初七日を終えてワシントンに帰って来たその日、空港周辺の気温が氷点下 3°C しかなかったのを肌で感じてそう思った。

12月5日(木)早朝から降り始めた雪は、朝の通勤時間帯頃から本降りになり、みるみるうちに積もっていった。公立学校は休校、政府機関は軒並み「liberal leave (各自の判断で上司の了解を取らずに休んでよい有給休暇)」が発表された。積もってゆく雪を見て子供達は大喜び、近所の子供がソリを持って通りを歩いているのを見るや、自分もやりたいと言い始めた。ママがどこかのヤードセールでソリを仕入れて来ていたことが奏効した。



積雪は昼前までに 15cm 近くに達した。ソリ遊びに興じる樹生を横目に、パパは雪かきを始めた。通りから玄関先までの歩道の雪を除き、車庫前の雪を取り除き、さらに通りを歩く人が転倒しないよう、スコップで除雪した。かいた雪は、階段横にどんどん積み上げて行った。通りから我が家の玄関まで行くには、先ず階段を上らなければならない。普段は英国蔦で覆われている斜面だが、この日は雪を積み上げてにわかすべり台の出来上がりだ。樹生はおろか、隣りのマリー、トーマス、向かいのアナ、アレックまでやって来た。早朝に出勤していた向かいのジョンが昼過ぎに帰って来た。ワシントン市内の英国大使館周辺は停電だという。「地下鉄も動いていないかもしれんよ」と言われ、パパは出勤を諦めた。この日は我がクアンティコ通り周辺に郡の除雪車が全く入らず、通りは雪が踏み固められてツルツルだ。試しにミニバンで走ってみたけれども、ちょっと怖かった。これじゃ北中部のアイオワ州辺りの冬景色と全く変わらない。1989年3月に卒業旅行で訪れたアイオワ州チャールズシティを思い出した。

ソリ遊びは昼食でいったん解散したが、それでも雪遊びがしたい樹生は、ママが作ってくれた焼き餅をほおぼるやいなや、再び外に飛び出した。すべり台が車道に滑り降りる造りになっているため、子供達が遊ぶ時には常に親が監視していなければならない。手持ち無沙汰なパパは、仕方なく次の造型に取り掛かる——「かまくら」である。庭の雪をかき集めて、玄関先のなんてんやさつきの前にどんどん積み上げた。さすがに子供が入れるところまでは無理かなとも思ったが、庭の雪だけで十分な高さや広さが確保できる「山」になった。後は山の麓からスコップで穴を掘って出来上がりである。

結局、この日は一日中外にいた。子供達は終日雪遊びに精を出し、パパは子守りと雪かきで大仕事だった。この積雪のおかげで、11月末から苦しんでいた「時差ぼけ」が一挙に解消された感じである。

今年の冬は寒そう・・・大雪の後日談

さて、12月5日に米国東部一帯に降った大雪にはさらに後日談がある。

先ず、翌6日、郡の公立学校は再度休校となった。しかし、千智が通う私立の保育園は連邦政府機関が休日にならない限り休日にはならないため、千智だけは保育園に連れて行った。聞くところによると、大雪の当日も開いていて、千智のクラスの幼児も5人くらいは来ていたらしい。

一週間後の12月11日(水)早朝、今度はワシントン一帯を「アイス・ストーム(氷嵐)」が襲った。地上の気温が低いために、空から降ってきた雨が地面に落ちると同時に凍ってしまう現象だ。送電線に出来た氷柱はどんどん長くなり、葉が完全に落ちて枝だけになった木々には樹氷ができた。こんな天候は、日本では経験したことがない。公立学校はまたもや休校。千智の保育園は開校していたが、玄関から通りまでの歩道がツルツルで外出すること自体がそもそも危険だということで、子供は2人とも休ませた。パパは朝から会議が予定されていたため、足元に気を付けながら、地下鉄で出勤したのであった。

去年の12月といえば、前半は薄着でいられた。Tシャツでいた記憶すらあるのだが、今年はとにかく寒い。一昨年の1月以来経験していない「氷点下10℃」も目前になる寒さを既に経験した。12月半ばにいったん寒さが緩んだことで雪はほぼ融けてしまったけれど、今年はまだまだ降りそうだ。先が思いやられる。

「これは効くかもしれない」

ママのロルフィング体験

「ロルフィング」と言われてもピンとくる方は少ないと思いますが、アイダ・ロルフと言うアメリカ人が始めた施術で、体の筋肉を包む筋膜に働きかけ重力に対しバランスのとれた状態に再調整していきます。重力に逆らわない動きが取れるように体を調整していくので、より楽に体を動かすことが可能になります。基本的に10回で全部の施術が終わり、終わったらその効果は一生続くと言われています。他の癒し系のマッサージと違うのは、やってもらうだけでなく各回ごとに宿題が出て体の動かし方を自分で体得していかなければなりません。

マッサージの学校に通っている時、よく先生から運動選手がよく受けていて「効くけど痛い」とロルフィングのことをいっていたのですが、そのまま聞き流していました。ある日クラスメートのレズリーが日本人のロルファーに会い、彼のやり方は痛くないそうだと言って連絡先を教えてくださいました。興味を持った私はさっそく学校を卒業してから、1回90ドル×10回と決して安くはないのですが、百聞は一見にしかずだと思って連絡を取り、ロルフィングを受けてみることにしました。

私達のロルファー(ロルフィングをやる人のこと)は三好雄一さんという60代の男性で、凄く上手いのです。私など全く適わないぐらいの知識と腕前。そんなに力を入れているようには見えないのですが、確実に、硬く凝り固まった筋肉をほぐし楽にしてくれます。まるで魔法の手。私もその技術を学びたいと思っているのですが、学校はコロラド州のボルダーにしかないのも、難しそうです。私はまだ全回終わっていないのですが、それぞれの回で施術する場所が決まっておき、先ず最初は沢山空気が吸えるように胸の周りをほぐし、次に足と順番にやって行きます。体の外側の筋肉だけでなく内側の筋肉にも働きかけるので、こんなところも凝っていたのかと気付かされます。10回終わるとどれだけ体が楽になっているか楽しみです。

三好さんの話は時々難しく理解できない時もあるのですが、体のことだけでなく生き方についても考えさせられます。日本にも20名ほどロルファーがいるそうですが、体の痛みなどを抱えている人にお勧めします。(美澄)

本場で飲むホットチョコレート

冬の小旅行その1:ペンシルベニア州ハーシー

読者の皆さんは、「ハーシー」という名前をお聞きになったことはあるだろうか。日本では、「キスチョコ」、そして「ホットチョコレート（ココア）」のブランドとして有名である。バレンタインデーに心をときめかせた経験のある方なら、贈る側であっても贈られる側であってもご存知かと思う。実は、この「ハーシー」、ペンシルベニア州の州都ハリスバーグ近郊の企業城下町である。20世紀初頭にミルトン・ハーシー氏が一代で築いた食品メーカーの従業員とその家族の生活を守るため、ハーシー家は学校や病院も設立した。そして、従業員子息に夢と娯楽を提供するため、この町には広大な敷地を持った遊園地「ハーシーパーク」も開園されたのである。



毎年クリスマスの季節が近付くと、「ハーシーパーク」は開園時間を正午から午後10時迄と変更し、各施設や街路樹を色とりどりの電球で覆い、幻想的な遊園地へと早変わりする。冬場のペンシルベニアは観光で訪れるスポットが少ないが、ここハーシーパークは、空気が冷たいことを逆手に取り、夜間のライトアップによって一大集客スポットとして成功しているのである。はっきり言って、子供連れよりも恋人と二人でデートに使うのにお奨めのスポットである。当然のことながら寒さは相当に厳しい。訪れる観光客も、ここはカナダかアラスカかというような防寒対策バッチリの出で立ちでやって来る。手袋なしで訪れると後悔することになるだろう。でも、体が冷えたらファーストフードのコーナーに逃げ込み、本場のホットチョコレートに、この界隈特産の焼きたてプレッツェル、揚げたてフランネルケーキで暖を取ることができる。

12月14日（土）、翌朝にお馴染みストラスバーグ鉄道で開催される「サンタ列車（サンタクロースが列車に乗り込み、40分の機関車ツアーの間に子供達にロリポップを配るイベント）」に参加するため、前日からストラスバーグ周辺で一泊することにした。泊まったのはハリソン・フォード主演の映画「目撃者」のロケ地にもなったアーミッシュ人の町「インターコース」だが、ホテルにチェックインする前に、ハーシーパークに寄り、クリスマス電飾で覆われた遊園地街「キャンディレーン」に子供達を連れて行った。一つ一つのアトラクションはどこでもありがちなものだが、夜の遊園地は趣が全く異なるし、子供達は楽しそうに乗り物をハシゴした。極めつけは「トワイライト列車」という、小型蒸気機関車が客車を牽き、電飾でライトアップされた線路脇の風景を楽しませながらゆっくり走るという乗り物だ。樹生は列車に乗れるだけで満足、千智は光の海の中を走る列車でお姫様気分を満喫してこれまた大満足だった。

翌15日（日）のストラスバーグ鉄道もそれなりに良かったが、さすがにここを訪れるのも5回目となると、子供達はともかくとして親が持たない。今回は趣向を少し変えてアーミッシュ文化探訪に軸足を移し、アーミッシュの手工芸品店やレストランにも立ち寄ることにした。ストラスバーグの中心街から北に少し走ったところに、「ハーシー農場」というドライブイン兼郷土物産販売店がある。道順的にそれが最も効率的に移動出来るからという理由だけで昼食のために立ち寄ったのだが、ここの昼食はビュッフェ形式の注文もできるので、単一メニューのアーミッシュ料理よりは選択の幅があって親にとっては大助かりだった。

クリスマス、フレンチの香りを満喫

冬の小旅行その2：ルイジアナ、ミシシッピ―避寒旅行

12月20日（金）から25日（水）にかけて、ルイジアナ、ミシシッピ―両州をドライブ旅行した。今年の冬は寒さが厳しい。ポストンやナイアガラには行ってみたいけれど、冬場はやっぱり南に行こう、美澄と私は南部再訪で意見が一致した。どうせならクリスマスはフレンチクォーターでジャズの生演奏でも聴きながら過ごそう——このため、目的地はこの夏に行きそびれたアトランタではなく、ニューオリンズに決まった。それに南部の大プランテーション（農園）を見てみたいという、夏のアトランタでできなかった行事もドッキングさせ、ルイジアナ州ニューオリンズ～バトンルージュ間の「リバーロード」やミシシッピ―州ナッチェス周辺に点在する歴史的な大邸宅を幾つか訪問する計画を立てた。

「L・S・U! L・S・U!!」：この旅行の日程を組むに当たって、先ず最初に決めたのは21日（土）のルイジアナ州立大学（LSU）構内でのバスケットボール観戦だった。相手は全米大学ランキング第1位のアリゾナ大学だったからだ。30位くらいのLSUが普通に戦って勝てる相手じゃないけれど、地元なら勝ち目はあると少しは期待した。また、昨年今の頃ワイオミング大学でも経験したが、「おらが町」のチームを応援する地元住民の熱狂は、ワシントン辺りで見るとプロチームの試合とは訳が違う。一度ぐらい家族に経験させてもいいかと思った。そして結果は案の定地元LSUがアリゾナ大学を66-65の僅差ながら番狂わせを演じ、試合後のバスケットコートは喜びを選手と分かち合おうとんだれ込んで来た学生やサポーターで埋め尽くされ、「L・S・U! L・S・U!!」のシュプレヒコールが体育館内にこだました。冬の娯楽が極端に少ないワイオミングの場合と違い、LSUの観客は学生やOBとその家族、それにアリゾナからはるばるやって来た応援団が殆どで、近所の住民が気軽に来て応援するという雰囲気ではなかったが、うちの家族にとってもこの学生スポーツの熱狂振りは新鮮なものとして映ったことだろう。わざわざ来た甲斐があったなあ。応援し過ぎて声が枯れてしまったが。

プランテーションは大人の観光地？：ミシシッピ―川兩岸は、18世紀末から19世紀にかけて、フランス系入植者が広大な土地を買い取り、大邸宅を建て、大農園を経営した。黒人奴隷を使い、最初はインディゴ（染料となる低木）、そしてサトウキビやタバコの生産で財を成した。ミシシッピ―川は農産物輸送や人の交通のために活用される。入植地の開拓は、川の兩岸を起点に始まった。こうした南部貴族の栄華は永くは続かず、1860年代初頭の南北戦争で戦況が北軍優位に傾くにつれ、南部戦線はミシシッピ―川兩岸の主要都市が次々と陥落する形で南下、ミシシッピ―州ヴィックスバーグが陥落したことにより、その下流のプランテーションは、ミシシッピ―川に浮かぶ北軍艦艇から砲撃を受け、建物の多くが大破した。辛うじて北軍将校と交流があった家族の所有物は砲撃を免れ、歴史的な建物の幾つかは今も川沿いに点在し、ニューオリンズ観光の隠れた目玉となっている。これまでも、南部を訪れる度に少しずつ見学していたのだが、今回は三日間の間に5件を駆け足で見た。ニューオリンズに最も近くて建造時期が最も古い「デストレハン」、バトンルージュの対岸に位置し、この境界の大邸宅の中でも特に大きい「ノッタウェイ」、水上交通の中継地として栄えたミシシッピ―州ナッチェスで、東洋建築様式を取り入れて異彩を放つ「ロングウッド」、建物周辺を26本の大きな柱で囲み、ベランダや踊り場を広く取った「ダンリース」、ナッチェス防衛の要として、ミシシッピ―川に向けた大砲が設置された砦に隣接して見晴らしが良い「ロザリー」である。どこも



現在はNPOが自治体の委託を受けて施設の保存管理を行っており、ツアーガイドとして各部屋の造りや調度品の解説をしてくれる。歴史に多少の興味がある大人にとってはなかなか興味深い観光スポットなのだが、乗り物と違って全く動かない建物は子供達には不評で、大人しくツアーにくっついて回ってくれるどころか、大声を張り上げて泣いてダダをこねたり、触っちゃいけないものに触ったり、挙句の果ては調度品や柱に「蹴り」を加えたり、ありとあらゆる手段を使って親の観光を妨害にかかった。退屈なのだから仕方がないとはいえ、いくらなんでも見苦しい。1週間前にペンシルベニアでいい思いをさせてもらったことも、クリスマス直前でよい子にしていけないとサンタさんにプレゼントを貰えないということも関係ない。子供達にとって今が退屈ならどんな悪態も許されてしまうのである。結局、16年前にナッチェスに来て「ロングウッド」と「ロザリー」の中を見たことのあるパパは、ママがツアーに参加している間、子供をなだめながら外の庭で待つことになった。子供達がこうした建造物の歴史的価値を理解できるほど分別が付くのはずっと先のことだ。こうしたプランテーションには「B&B(ベッドと朝食付き)」と呼ばれる宿泊サービスをやっているところも多いのだが、その多くは子供が12歳以上でないと受け付けてもらえない。仮に受け付けてくれたとしても、2月の「ペンブローク・スプリングス」で起きた「皮製ソファ落書き事件」の二の舞になっていたかもしれない。

史上最悪のドライブ：バトンルージュまで来たら、やっぱりミラー夫人とクラウリーのカウエン夫妻を避けて通るわけにはいかない。22日(日)夕方にミラー夫人を訪ね、ご長男夫妻も交えて中華料理店で食事を共にした。翌23日(月)はカウエン夫妻を訪ね、ご自宅でお昼をご馳走になった。どちらの家にもクリスマスのプレゼントを持って行ったのだが、逆に子供達はオモチャをプレゼントされ大喜びだった。また、どちらの家でも、LSUがアリゾナ大学に勝った試合がすぐに話題になり、カレッジスポーツがいかに地元住民の関心を集めているかを実感させられた。さて、カウエン邸を午後2時過ぎに出発し、ニューオリンズを一路目指したわけだが、頑張れば2時間30分で着けるところがホテル到着が午後7時前になってしまった。理由は雨だ。クラウリーからバトンルージュまでは通常1時間少々 of 行程なのに、渋滞の影響で2時間かかった。この渋滞の最大の原因はバトンルージュ市内で起きた自動車事故で、ミシシッピ川を渡って同市内に入ることのできる橋はただでさえ1本しかないのに、その橋の向こうで事故が起きては、渋滞するのもやむを得ない。なんとか橋を渡り、事故現場を迂回するために一端高速道路を下りてLSUキャンパスの中を突っ切って同市南部から再び高速に乗った。渋滞も解消され、これで一気に走れるぞと意気込んだはいいが、本当の地獄はここから始まる1時間だった。バトンルージュからニューオリンズにかけて大きな雨雲が発生していて、バケツをひっくり返したような雷雨の中を前の車のテールランプだけを頼りに時速40マイル(約60km)で走り続ける恐怖だ。時折落雷の直撃を受けて辺りが真っ白になる。一瞬目が眩み、その直後は何も見えなくてアクセルを緩めるかブレーキを踏んでしまう。ハンドルを支える両腕が緊張でガチガチになった。途中何度か高速を下りて休憩しようかとも考えたが、その度に「もうちょっと行ってみようか」と迷って結局出口を逃し、そしてフロントガラスを打ちつける大雨に後悔を強いられる。こんな夕立、ワシントンや東京じゃ夏ですら経験したことがない。いくら避寒目的で南部にやって来たとはいえ、まさか真冬にこんな夕立を経験するとは思わなかった。お陰でニューオリンズに辿り着いた時には殆ど気が抜けて真っ白な状態で、夕食で飲んだ地ビールとカクテルで酔いが大いにまわった。とにかく、皆無事で良かった。

お子様のアトラクション：クリスマスはニューオリンズで過ごした。フレンチクォーターで迎えるイブはさぞかし賑やかだろうと思っていたが、お土産物店やカフェ、レストランの多くがいつもよりも早く閉店し、意外と寂しいイブになってしまった。翌日は祭日なので観光地の多くが閉館、感謝祭やクリスマスの時期の旅行は期待した通りには動けないので注意が必要である。ところで、今回の旅行は全般的にお子様にとっては不評で、悪態をつく子供達をなだめるのに非常に苦労した。南部の観光地の多くが10歳未満の子供にはあまり優しくなく、フレンチクォーターで二泊したからといって、ジャズやブルースの生演奏を聴いてバーで一杯やるような大人の過ごし方は全くできない。救いは食事で、この地域独特のオクラ入りスープ「ガンボー」は、味や色がカレーライスと似ているからか、元々オクラが好きだからか、とにかくよく食べてくれた。日中の観光といったら大人にとってはフレンチクォー

ターでアンティークやアクセサリ、絵画や置き物等を見て過ごし、疲れたらカフェに入るというパターンなのかもしれないが、お子様を懐柔するために先ず水族館に連れ出し、さらに路面電車に乗せた。ここの水族館はかなり面白くて、ゆっくり見たら半日では足りない。家族旅行にはお奨めの観光スポットである。

パパの自己申告書(その5) ウォルフェンソン総裁訪日

この2ヵ月、日本関係の仕事をあまり集中してやれなかったことにストレスを溜めていた浩司パパであったが、12月になって、本当に久々に日本絡みの仕事をやることになった。1月13日から15日にかけて、世銀のウォルフェンソン総裁が訪日し、財務省、外務省、JBIC（国際協力銀行）、JICA（国際協力事業団）、日本経団連等を訪問するというので、ブリーフィング資料を作れという指示が、渉外局から飛んできたのである。以前であれば、こうした作業はJBICから出向で来ていた工藤さんと分担してやったのだが、工藤さんが帰国した後、日本関連の情報収集は私が一手に引き受けることになった。また、経団連は民間セクター・インフラ開発局にJBICから来られていた島本さんが窓口を引き受けられていたが、島本さんも12月中旬で世銀での任期が切れるため、島本さんと相談して、経団連の分のブリーフィング資料も私が取りまとめた。

日本のODA予算は、今年度が前年比-10.3%だったのに続き、来年度も政府原案では-5.8%、3年連続の減額で、合計2割の大幅カットとなった。日本経済が危機的状況を迎えているこの時期にあって、ODAのように日本に還元される利益が目に見えないものに予算を注ぎ込んでいる余裕はないということとはよくわかっているつもりであるが、公共事業を積み上げれば不況脱出はかなうという発想もどうかと思う。成果を目に見える形で国民にきちんと示してこなかったこれまでのODAのあり方は当然問われるだろうが、国際舞台で既に大きな存在となってしまった日本が、国内が厳しいからというのであっさり国際貢献の規模を縮小してしまったら、国際的な信用を失うのではないだろうか。何かというと「顔が見える」二国間援助ばかりを温存して、世銀など国際機関を通じた多国間援助の方から予算をバツサリ切る傾向が日本には強いが、経済的繋がりから二国間援助がアジア中心で行なわれている一方で、半ば国際社会の責任とも言えるアフリカ的最貧国支援に対して有効な二国間援助ができない今の日本が、多国間援助の予算を大きく削減するということがどういう意味なのか、読者の皆様にも考えていただきたいと思う。

さて、こうしてまとめたブリーフィング資料だが、JICAの部分は不要になってしまった。JICAの総裁が1月10日頃から2週間を超える中南米出張に出ているから、ウォルフェンソンがJICAを訪問する意味がないということらしい。世銀にとってJICAとはその程度の存在なのだと思う反面、そんな長期間中南米に出張するのなら、JICA総裁もせめて出張の復路でワシントンに立ち寄り、世銀を訪ねたらいいのに、なんとロサンゼルス経由でさっさと帰国されると聞き、とても残念である。JICAにとっても世銀というのはその程度の存在なのだという事なのだろう。

ぬいぐるみを抱いて眠れ！

この頃の子供達はあまり良い子じゃない。他の人と外食しても、周囲にお構いなしで行儀は悪く、自分の食事が済めば、コップの中の氷で遊ぶは、椅子から下りて踊り始めるは、とにかくじっとしてられない。「じっとしてて！」と頼んでも聞く耳を持たない。「他人のものは自分のもの、自分のものは自分のもの」で、一つしかない道具やおモチャを巡ってすぐに兄妹で喧嘩を始める。樹生などは、自分が妹を叩いて泣かせてしまったことは棚に上げて、「チーちゃんがこんな悪いことをした」と凶々しくも告げ口にやって来る（千智自身も、叩かれて仕方がないようなことをしていることが多いのだが）。パパも子供の頃は「落ち着きがない」と散々言われたので、子供だったら仕方がないことなのかもしれないが、他の家の子供達と比べても我が子の落ち着きのなさは尋常ではない。

そんな子供達との毎日は嫌になることが多いのだが、そんな中にも子供達の優しさや可愛さを垣間見ることが時々ある。樹生は確かに妹をよく本気で叩いて泣かせるけれど、自分のお菓子を千智にお裾分けするような優しさを見せることがある。また、最近はずかぬいぐるみに凝り始めていて、随分と昔に知人からいただいたクマやウサギのぬいぐるみをきちんとベッドに寝かせ、布団をかけて隣りで一緒に眠るのだ。昼寝の時もぬいぐるみを抱いて寝ていることが多い。12月に「ハーシーパーク」に連れて行った時も、ギフトショップで「これが欲しい」とねだったのはハーシーの板チョコレートベースにしたぬいぐるみだった。自分の言うことをなかなか聞かない妹と違って、ぬいぐるみは自分に反抗しないから優しくなれるのだろうか。でも、それを見た千智がお兄ちゃんの大事なぬいぐるみにすぐに手を出すと、とたんに喧嘩がまた始まる。だからといって千智用のぬいぐるみを準備すればまた喧嘩の種になる。ホント子育ては難しい。

友を道連れに、走れデブオヤジ！

12月14日（土）、パパは近所で開催されたローカルマラソンに久しぶりに出場した。普段の練習はあまりしていないが、これをきっかけに走り込みを強化して減量を加速しようとの目的である。しかも、一人じゃ寂しいので、同じくアメリカに来てからの体重増加に悩む JICA 事務所の若手職員片山くんと、JICA から研修目的で世銀に来ている梅宮くんを誘い、梅宮夫人に荷物番をしてもらって、8km のコースを走った。3人とも無事完走し、誘った自分としては取りあえずほっとしたところだ。

パパの体重

84 kg

(1月4日現在)

そもそも練習代わりにマラソンを走ろうという考えが不純だ。以前の自分なら 33~34 分程度で走れたのが、今や途中でウォーキングも交えて 47 分もかかってしまうようになった。こちらのマラソン大会は、出場者の半数以上が女性ランナーで、確かに走っていて楽しいことは楽しいが、脚のスタミナは全く失せてしまっており、走っていて息切れよりも足の痛み、乳酸がたまって両脚がむくんで来る感じに悩まされた。若かりし頃の自分の姿を思い浮かべると、本当に無残だ。

残念ながらワシントンでは 12 月中旬でシーズンオフ、次のマラソン大会は 2 月半ばまで開催されない。その間どのように減量を進めて脚力を付けるか、大きな課題である。

編集後記～山田家短信

- これがアメリカで迎える最後のクリスマスということで、山田家では大いに奮発して軒先を小さな五色の豆電球で飾り付けました。玄関の手すりだけでなく、軒下のさつきにも、豆電球のネットを被せ、我が家をおとぎ話の世界のように電飾で彩りました。負けじと近所の人々も軒先の電飾をグレードアップさせ、クァンティコ通りはさながらメルヘン街道の装いとなりました。夜、仕事を終えて帰宅するのがとても楽しくなります。とりわけ今年の冬は寒いので、屋外の電飾がとても綺麗に見えるようです。ルイジアナ南部旅行中に見かけた民家のクリスマス電飾があまりきれいに見えないのは気候のせいではないかと思いました。(浩司)
- 天災は忘れた頃にやってくるといいますが、我が家の地下室にまた雨水が浸水しました。以前浸水した時に殆どのものは床に直接置かず、コンクリート・ブロックでかさ上げしておいたので、被害は少なかったのですが、新年早々の 1 月 2 日仕事始めに学校始めで忙しい朝でした。比較的早く起きていたから良かったものの、朝一番から濡れた段ボールの始末、水の掃き出しと大変でした。思えば前日夕方浩司さんが外出して「立っているだけで濡れる」と言っていた時チェックしておけばよかったのですが、後の祭りでした。秋頃までは濁水が心配されていたのですが、11 月頃から例年を超える降水量で、1 月 3 日現在、今日も雨が降っているのですが、ポトマック川の氾濫が心配されています。(美澄)